

# 東三河 地域研究

平成26年6月16日発行  
編集・発行：  
公益社団法人東三河地域研究センター  
住所／豊橋市駅前大通二丁目46番地  
(名豊ビル新館6階)  
TEL／0532-21-6647  
FAX／0532-57-3780

通巻126号 2014.4

公益社団法人東三河地域研究センター

東三河地域問題セミナー第1回公開講座

「湖国に広がる近江商人の理念『三方よし』」

特定非営利活動法人三方よし研究所 専務理事 岩根 順子氏……………2-11



平成26年4月24日開催 東三河地域問題セミナー第1回にてご講演される岩根順子氏

# 公益社団法人東三河地域研究センター 東三河地域問題セミナー第1回公開講座

講演：「湖国に広がる近江商人の理念『三方よし』」

特定非営利活動法人三方よし研究所 専務理事 岩根 順子 氏

平成26年4月24日（木）14時～16時 豊橋市民センター6階多目的ホールにて講演を行った。

## 講演「湖国に広がる近江商人の理念『三方よし』」

特定非営利活動法人  
三方よし研究所 専務理事  
岩根 順子 氏



### 1. はじめに

ご紹介いただきました岩根と申します。今日は滋賀県彦根市からきました。三方よし研究所は一昨年に10周年を迎え、現在はNPO法人として34名の会員と、地元の中堅スーパー（平和堂）など5社が法人賛助会員になっており、年間200万円くらいの予算で運営しています。今回のセミナーのように、全国で近江商人のことを講演させて頂いて、一人でも二人でも近江商人を理解していただき、正しい日本のあり方、正しい人の生き方を学んでいただけるといいと思っています。また、近江商人関連書籍を発行し、近江商人の理念や商法について発信しております。

近江商人については、長い間あまりいい印象で語られることはありませんでしたが、「三方よし」という言葉とともに、その本質が見直されてきました。今日はそうした歴史的な背景や、滋賀県や三方よし研究所が近江商人の理念普及をどのように推進してきたかをお話いたします。

### 2. 近江商人とは？

「近江商人が歩いた跡にはぺんぺん草も生えない」「近江商人が売った蚊帳には天井がなかった」などと言われてきた近江商人ですが、昨今、その経営理念が再認識されています。

これは滋賀県の努力もありましたが、様々な著名な方の発言が大きく影響しています。その最たる人が田原総一郎さんです。田原さんは彦根の商家のご出身ですが、商家が嫌だったので早稲田大学卒業後、岩波映画に入って評論活動・作家活動をしています。20年くらい前までは、近江商人についてはあまりお話されませんでした。最近琵琶湖塾の塾長というお立場もあるのですが、「近江商人は情報戦略をうまく活用した商人で、すばらしい」といわれ、非常に大きな追い風になっています。

この「三方よし」という言葉を全面的に広げたの

が、同志社大学名誉教授の末永國紀先生で、著作の中で「CSRの源流は『三方よし』である」とされ、積極的に、「近江商人の経営理念は三方よしにある」と発言をされています。現在多くの企業が、環境レポートやCSR報告書を作成されていますが、こうした社会の潮流の中で、「三方よし」が広まっています。

滋賀県が、近江商人の理念普及に着手した発端は、『近江商人』の著作者である作家の邦光史郎さんが、「滋賀県で何とか近江商人に光を当てないといけない」、「近江商人は滋賀最大の無形文化財」と当時の稲葉知事に進言されたことにあります。そして1991年に世界AKINDOフォーラムが開催され、この事業に参加された堤清二さんが、日経新聞の記者のインタビューで答えて、「近江商人の経営哲学『三方よし』に私は大いに学びました」と話されたことが、新聞に載って、「三方よし」が広まりました。当時セゾングループの代表で、「物を売ることは文化をつくること」という発言をされた方で、社会的な影響力が大きく、この頃から「三方よし」という言葉が社会に広がって行きました。堤清二さんの父親は滋賀県出身で、西武グループ創業者の堤康次郎さんです。地元近江鉄道を始め、ホテルなどの開発を進めるなど、地元経済界に今も西武グループは大きな影響力を持っています。

「三方よし」は国内のみならず、海外でも注目され、社会説明責任研究所所長のリチャード・エバンスさんが、10年後の2001年のAKINDOフォーラ

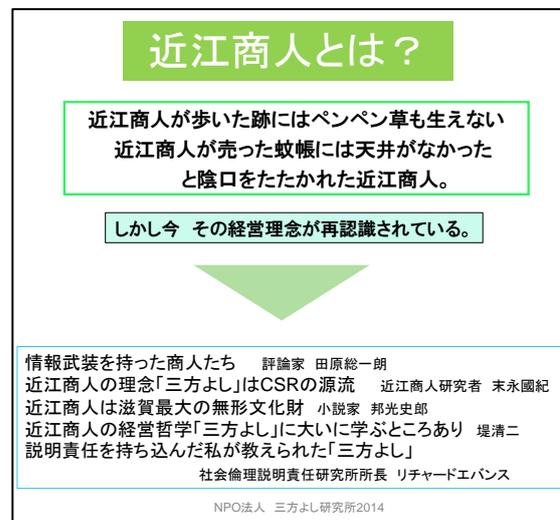


図1 近江商人とは？

ムで、「説明責任は日本のビジネスに欠けていることだからどうしても伝えたい、ということで日本に来たが、逆に『三方よし』という日本独自の経営理念があった」話され、この方の影響力も非常に大きかったので、広まりました。

1990年以降、急激に広まった近江商人の経営理念の「三方よし」ですが、実は、この言葉は滋賀大学経済学部教授だった小倉榮一郎先生の『近江商人の経営』(1989 発刊)の中で初めて登場したものです。

三方よしという言葉自体はかなり前からあったのかもしれませんが、「売り手によし 買い手によし 世間によし 三方よし」という理念が近江商人の経営理念とされたのは初出だったのです。近年脚光を浴びてきた言葉ですが、それが時代の波に乗って、多くの企業のバックボーンとなっているのは誇らしく思えます。

図2の左下は、東近江市小脇町に建っている鎌倉時代の商人像で、山越え商人といいます。左上は近江商人博物館のジオラマですが、狭隘な山中を何人もがこのように武装して、鈴鹿山脈、霊山山脈を越えて商いに行きました。それが江戸時代になると、右上の行商姿のように、非常に平和な格好をしています。また右下は、明治の中ごろの日野商人の写真です。近江では古い時代から商業が発達してきましたが、私たちは「近江商人」として捉えるのは、江戸時代以降、明治以前の商人までの範囲を考えています。また近江にとどまって商いをした人も近江商人とは定義していないのです。

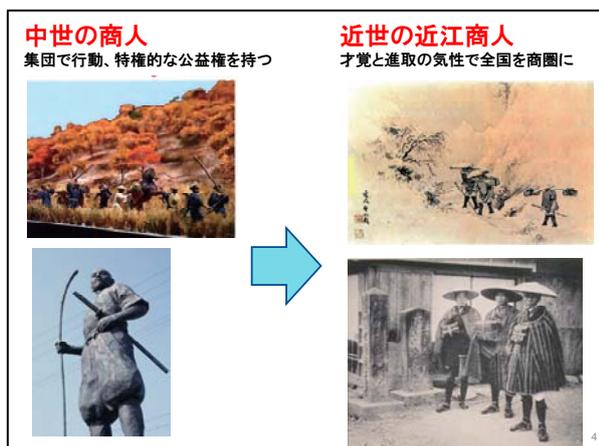


図2 中世の商人と、近世の近江商人

### 3. 近江商人発祥の地的背景

東三河地域の近くにある浜名湖の地域を遠江といいますが、私が来た滋賀県は近江です。これは大和から遠い近いということから名づけられており、平安時代以前から近江は都と近い関係がありました。

近江商人の発祥として、まず琵琶湖があるのが大きな要因です。それから、日本海に非常に近く、日

本海を通じてたくさんの渡来人がやってきています。また、平安京の前に大津京という、わずか4、5年でしたがこの地に都もありました。さらに「三方よし」の大きな力になったのが比叡山の存在です。

比叡山は仏教文化発祥の地で、多くの宗派の基礎を作った僧がここで修行しています。安土桃山時代になると、信長、秀吉、三成、光秀など戦国武将の活躍の場所となり、江戸時代には井伊直政が彦根に城を築き300年、ほぼ滋賀県全域を統治してきました。井伊家の積極的な産業振興政策の展開は、近江商人発祥の大きな要因にもなっています。

現在の滋賀県には、名神高速道路や東海道新幹線、がとおりたいへん交通の便がいいのですが、この地は古来より、多くの官道が通過する交通の要衝でした。このことも大きな要因になっています。

一方、現在の滋賀県経済状況を見てみますと、人口は140万人しかいませんが、県民所得率は東京に次いで第2位、県民増加率は全国第3位となっています。そして、出生率も非常に高く、若年層が多いのが特徴的です。

京阪神まではJR琵琶湖線で20~30分の距離なので滋賀県に移入してきている人も多くなってきました。昭和30年代の滋賀県は、農業県でしたが、現在では製造業などの工業生産高が全産業の42.6%を占めています。さらに専業農家が少なく、兼業農家率が高く、集落営農が非常に発達しており、秋田に次いで2番目くらいの組織率があると聞きます。また、一家平均3台の乗用車があり、耐久消費財の購入率も非常に高く、経済的に豊かな県だと言えます。

こうした背景の中で、「三方よし」の精神が具現化されている例として、「まちづくり活動」が活発です。さらに環境保全の意識が非常に高い県民性となっています。琵琶湖の存在が大きな要因で、環境先進県としての滋賀県があります。様々な時代の移り変わりの中で、人々の生活に大きく影響を及ぼした琵琶

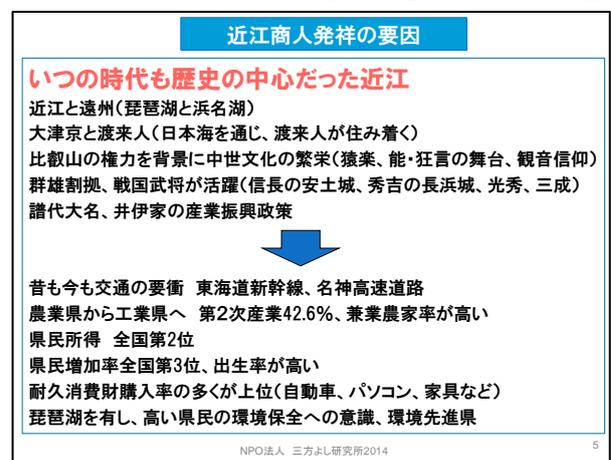


図3 近江商人発祥の地的背景

湖の存在を抜きに近江や滋賀を語ることはできないのです。

#### 4. 近江商人発祥の要因

近江商人の発祥の要因についても、この琵琶湖の存在が第一に考えられます。普通は「<sup>みずうみ</sup>湖」の国と読みますが、県内では、琵琶湖を「うみ」と言います。それくらい琵琶湖が大きく、県土の6分の1を占めています。鉄道が開通するまでは琵琶湖上で物が運搬されており、東北、日本海、岐阜からも陸路ではなく琵琶湖を通じて京都、大阪に荷物が運ばれ、琵琶湖は道の一部でもありました。

次の要因として比叡山の存在が考えられます。ここは日本仏教文化の発祥地で、比叡山延暦寺で天台宗を開いた最澄は「忘己利他（己を忘れ他を利すること）」と「一隅を照らす（世の中の隅々まで見なさい、世の中で埋もれている人を引っ張り出さなさいということ）」という言葉を残しています。この1000年以上前の考え方が、「三方よし」という言葉に繋がっています。一方、「一隅を照らす」という言葉は、「この子らを世の光に」という、戦後間もない時代に障害者福祉に尽力された糸賀一雄氏の福祉の心に受け継がれています。このように滋賀県というのは歴史が深い土地柄ですが、先人の気持ちをずっと今に引き継いでいるところが、律儀な県民性だと思います。

近江は、古来より道路網が発達し、京の都の入口にあたることから、常に戦場となっていた土地です。道が発達することによって他の国との交流が非常に充実しました。さらに、京都、大阪という古くから最先端産業や文化が息づく大都市に隣接していたことも商業発展の大きな要因でしょう。

つまり、湖があったこと、仏教が発祥したこと、当時から交通網が発達していたことなどが近江商人発祥の大きな要因ではないかと思えます。

限られた地域から多くの商人が発祥した要因については様々な研究者の見解がありますが、近年、最も有力と考えられる発祥説として、近江の領地が細分化されていたことが最大の要因ではないかと言われています。

中世から戦国時代にかけて、京の都に隣接する近江はいつも合戦の場となっていました。そのことが遠国の大名たちへの兵站を担当することが近江の役割でもあったのです。南部の殿様の兵站を担当した高島商人は盛岡に大挙出かけています。また、家康の兵站を担当した八幡商人は江戸日本橋の土地を与えられました。

一方、五個荘を中心とする湖東地方の多くは、井

伊家の領地でしたが、戦勝した各地の大名に分割して与えられた領地が多数存在します。

江戸時代の近江の領地分布図を見てみますと、大名の領地のほか、中世からの荘園や寺社の所有地が多く混在し、ひとつの村の中に複数の為政者の領地が存在することも相当数見られました。幕藩体制の時代、農民は自由に領地を出ることはできませんでしたが、遠国の大名の領地に住む人は、その大名の直轄地へは自由に出向くことができました。

一番顕著な例が、仙台（伊達家）や山形（最上家）であり、伊達家や最上家は近江国内に小さいながらも領地を有していました。ここに住む人は通行手形なしで、仙台や山形に出向くことが可能だったのです。今も山形や仙台には近江商人の足跡がたくさん残っています。

近江商人発祥の要因には自然や地形の他に、人為的な要素が深く影響していたようです。

**近江商人発祥の要因**

**近江は湖の国**  
琵琶湖の面積は県土の六分の一  
交通の発展、文化の交流 ⇒ 豊かな文化の醸成

**近江は仏の国**  
国指定文化財件数は全国で第4位  
(東京、京都、奈良、滋賀)建造物は全国一  
仏教寺院3200寺  
比叡山延暦寺は日本仏教発祥地  
開祖 最澄の教え  
「忘己利他」と「一隅を照らす」  
「三方よし」「この子らを世の光に」

**近江は道の国**  
古代より戦乱の場所  
領地の細分化  
他国との交流が比較的自由  
大消費地に隣接





NPO法人 三方よし研究所2014 6

図4 近江商人発祥の要因

#### 5. 限られた地域から発祥

ただ、もう少し細かくみてみますと、近江商人が発祥した地域は、滋賀県全土のうち近江八幡、五個荘、日野の県東南部に限られています(図5)。そのほか、県西北部に高島という地域で商人が発祥していますが、この高島商人の多くが盛岡へ出かけてまし

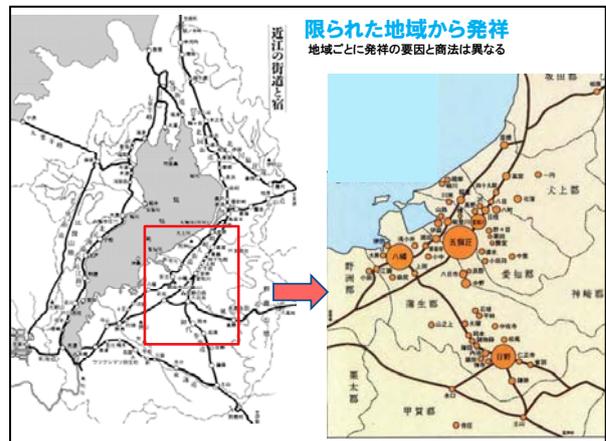


図5 限られた地域から発祥

たが、彼らは、盛岡に定住して近江には戻って来ていません。ところが、近江八幡、五個荘、日野の商人は、商いを国外にもとめるものの、あくまで本店は、近江においていたので、これらの地域には、近江商人の屋敷跡が多く残っています。

日野は、織田信長の下で、まちづくりや商業振興政策のやり方を十分学んだ蒲生氏郷が楽市楽座令を發布し、熱心に産業振興政策を行いました。そのことで日野椀、菓の製造が盛んになり、日野商人が日野椀や製菓を持って、北関東、東北に出かけ、しだいに支店を増やすボランティアチェーンのような展開を行っています。さらに出店地で、立ち行かなくなった醸造所の買い取りや、年貢米の処理に困った庄屋などの支援という形で、北関東を中心に醸造業を運営しています。日野商人は太平洋側にかなり出店し、御殿場や藤枝には日野商人の足跡を見ることができます。

近江八幡は、安土城落城後、豊臣秀次が八幡に築城し、「八幡山下町中掟書」という掟を出し、産業振興政策を行っています。これは信長が安土で行った手法を踏襲したものです。さらに、琵琶湖からの水路である八幡堀を整備し、町の発展を計画しました。ところが、秀次はまもなく失脚し、城は取り壊されます。しかし、この時の城下町産業振興政策によって、八幡は商業都市として発展していきます。とりわけ、畳表や蚊帳などの生産は問屋制家内工業によって生産され、大都市を中心に販路を広げた大商人が誕生してきたのです。大都市に出店できるきっかけは、大阪冬の陣の際に家康に兵站支援を行ったことで、江戸堀留の一等地を与えられています。やがて日本橋一带に西川家、伴家など八幡商人の商家が並び、多くの豪商が生まれました。

- 高島商人
  - ・盛岡の城下町建設に貢献
  - ・一族のチエーン展開が特色
  - ・明治新政府と小野組
- 八幡商人
  - ・先進的な商業振興政策と城下町
  - ・家康と江戸幕府の天領
  - ・海外に雄飛した商人
- 日野商人
  - ・蒲生氏郷の商業振興
  - ・関東での千両店、醸造業
  - ・日野椀や製菓
- 五個荘商人(湖東商人)
  - ・江戸時代後期から活躍
  - ・商家はもともと多く現存
  - ・農村として珍しい伝建地区





図6 各地域の近江商人

五個荘は農村地区として珍しい伝建地区の指定を受ける、綺麗な町並みが続きます。現在は東近江市

に編入されていますが、江戸時代末期以降に多くの商人が発祥しています。比較的、最近まで多くの商家がこの地で生計を営んでいたために多くの商家が現存しているのです。

図7は、江戸時代の近江商人の出店で、藤枝、静岡、新城など、太平洋側にかなりたくさん出ています。全国にはたくさんの近江屋、日野屋があり、三方よし研究所にも秩父にある近江商人の子孫の方にも入会いただいでご援助いただいでおりますが、現在もたくさんの足跡が残っています。

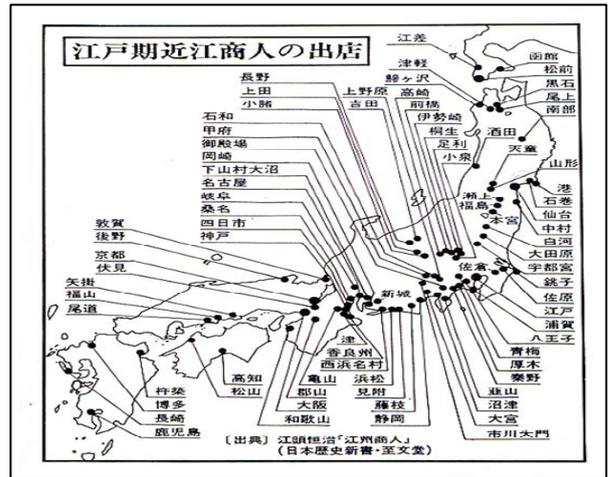


図7 江戸期近江商人の出店

## 6. 全国に残る近江商人の足跡

図8の左上の図は、ベトナムへ行った近江商人が、鎖国に遭って帰れず帰郷の実現を祈願した奉納額と言われています。右上は北海道の江差の海で、近江商人が持っていった持ち船が描かれています。

江差で、「江差の五月は江戸にも勝る」という歌が残っているくらい、非常にニシン漁でにぎわった町で、海産物問屋であった重要文化財の旧中村家住宅が現存しています。当時の北海道では、お米がとれなかったのですが、近江商人は却ってチャンスと見たのでしょうか、果敢に、多くの漁場開拓をしてい

### 全国に残る近江商人の足跡

海外に雄飛した近江商人



近江八幡日牟礼八幡宮の奉納額

北海道での漁場開拓



北前交易で活躍した近江商人の船団

北海道の開発と道路整備

松前藩の御用商人としての活躍。

漁場開拓に伴う、北海道での道路の設置

おせち料理の食材などを本土に紹介した

北前船での交易の始祖は近江商人



江差に現存する旧中村家(重要文化財)

NPO法人 三方よし研究所 2014

10

図8 全国に残る近江商人の足跡①

ます。今のおせち料理は近江商人の活躍があったからできたと言われてます。

図9の右上は川越市にある「近長」という看板が付けられた店ですが、これは近江屋長兵衛の店のことをいいます。また出石（豊岡市）のそば屋「近又」は近江屋又兵衛の店です。各地でこういう看板を見たら、近江商人と理解いただければと思います。



図9 全国に残る近江商人の足跡②

## 7. 近江商人の商いのシステム

### (1) 諸国産物回しを全国に展開

近江商人の商いは「のこぎり商い」と言われますが、北の産物を近江へ持ち帰り（登せ荷）、京都、近江、大阪で作られた製品を各地に持っていく（下し荷）商売をしています。今は、冷凍技術も発達しており、航空便もあるので、遠隔地の産物も簡単に入手できますが、この時代の商売は「諸国産物回し」という商いの方法で、産地と非産地との価格差に目につけた商いの方法で、現代の商社活動の基礎となったと言われてます。

例えば、山形では紅花がたくさんとれたため、江戸時代は、紅花で染める原染料（紅餅）を近江商人が現地で生産加工までして、それを京都へ持ってい

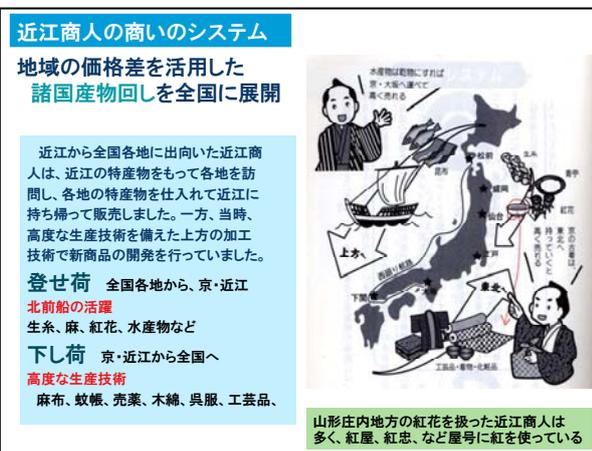


図10 諸国産物回し

き、京都で染め物などにして、全国各地へ持っていく商売をしています。伊藤忠商事も創業当時は紅忠という名前であったように、紅花は非常に大きな価値を持っていました。

### (2) 進んだ会計システムを採用

商いは、多くのものを動かしても、利益が出ても、結局は資本をどれくらい蓄積していくかということが大きな分かれ道です。近江商人は非常に早くから進んだ会計システムを採用しています。複式簿記はヨーロッパで始められたのですが、同時期に、近江商人の会計システムも同じような方法だったとされます。この背景には、本店が近江、支店が各地にあったことが大きな要素だったようです。近江商人の支店では独自採算で計算し、各支店の経常利益は全部本店に持っていき、それを資本金に組み込んで、本店の資本としました。商いで得られた利益は、「利益の三分法」という方式で、本店の資本に繰り入れるほか、不慮への蓄え（欠損や、災害の蓄え）、使用人へ利益を配分（賞与）することを300年前に実行しています。このあたりが非常に優れていると思います。

図11の写真は西川産業の帳簿ですが、400年分残っているということでは、すばらしいことだと思います。



図11 進んだ会計システム

### (3) 斬新な商品企画と販売戦略

また、近江商人の販売戦略にも注目することがあります。コマーシャルソングの先駆けと言われる亀屋左京松浦家は、伊吹山のふもとで「もぐさ屋」をしており、現在も続いています。この松浦家は、吉原の遊女に、「伊吹の切りもぐさ」を織り込んだ里歌を歌わせて、世間に評判を広めたり、自社の商いの様子を織り込んだ浄瑠璃を企画上演するなどエンターテインメント性のある販売戦略を展開しています。一方西川産業では、2代目の西川甚五郎が考案し

た萌黄の蚊帳」が大ヒットしました。従来灰色の蚊帳を鮮やかな配色のデザイン開発を行い、その斬新さが評判になると同時に、蚊を防ぐという機能だけではなく、涼しさという付加価値をつけ、さらには、江戸中に「萌黄の蚊帳」と美声の売り子を使って販売して大きな成果を得ています。

**近江商人の商いのシステム**

**斬新な商品企画と販売戦略**

**CMソングの先駆け、亀屋左京**

吉原に通いつめた左京は、遊女たちに宴席で「江州柏原 伊吹山ふもと 亀屋左京の切りもぐさ」を毎回歌うことを依頼、またく間に有名となった。さらに浄瑠璃のテーマに取り上げるなどエンターテインメント性溢れる販売戦略を展開した



**涼しさを売った西川の蚊帳**

箱根の木陰で昼寝をしていた2代西川甚五郎が思いついたのは、従来の灰色の蚊帳のデザイン開発であった。萌黄で染めた麻に赤いふち取りをすることで涼しさをアピールする商品となり、江戸市中を「萌黄の蚊帳」と美声の売り子を使って販売した。



図12 斬新な商品企画と販売戦略

#### (4) 企業の永続性を求めた人材システム

総務関係においては、企業の永続性を求めた人事システムがあります。五個荘や日野では、多くの子供が立派な商人になることが最大の夢でした。したがって、子供のころに丁稚見習いに入ります。商家の本店では、主人の奥さんが読み書きそろばんを教え、ここでお墨付きを頂いたものは、初めて丁稚として全国各地の出店に就職できます。

5年くらいたつと、一旦実家に帰してもらえます。これを初登りといいます。5年間のうちにどれだけ商売ができるようになったかを本家の奥さんが見定め、これなら大丈夫となれば次は昇進、駄目ならそのまま家で百姓に戻るということを繰り返しながら出世していくものです。

つまり、実力本位で昇進するシステムでした。さらに、たとえ長男であっても実力がないものは家業を継がさないということもあり、当面の生活に必要な財産を与えられたり、養子に出されたりしますが、「押し込め隠居」といいます。実力が伴わないものには権限委譲をしない厳しい決まりがありました。

実力のある人にはどんどん権限を委譲していき、能力重視の昇進があり、永続性を求めた結果、300年、400年と続いているのです。

また、自分のところだけの永続性だけでなく、地域一帯で企業の永続性を求め用途する考えもありました。同郷の人の起業を支援したベンチャーキャピタルのような「出世証文」というものが近江東部の商家から多く見つか、豪商が起業するものを支援していたことがわかります。

**近江商人の商いのシステム**

**企業の永続性を求めた人事システム**

**能力重視の昇進**  
本宅では商家の妻が、初等教育訓練を行い、見込みのあるものだけが丁稚となれた。3年、5年で、郷里に戻るが、能力がない場合には、店に戻れなかった。

**実力本位の権限委譲**  
出店の経営権の責任

**押し込め隠居**  
たとえ長男であっても能力がない場合には無理やり隠居させる。不適格者への厳格な処分

**出世証文** 同郷人の起業を支援



図13 企業の永続性を求めた人事システム

## 8. 近江商人の商いのころ

### (1) 商いは菩薩の業

近江出身に企業家として、西武鉄道の堤康次郎さん、ワコールの塚本幸一さん、ヤンマーの山岡孫三郎さんなどがいますが、彼らは諸国産物回しという商いを行っていませんので、近江商人の範疇に含みません。近江商人の中で、現在にまで著名な人は伊藤忠商事の創業者伊藤忠兵衛さんでしょう。

江戸末期の生まれで、典型的な近江商人と言えます。伊藤忠兵衛さんの「商いは菩薩の業」という言葉は三方よし、企業の社会貢献ということを言い表していると思います。

「商いは菩薩の業」とは、商売は自分が人のためにしてあげるということではなくて、仏様から遣わされた身で商売をさせていただいているということです。小説家の童門冬二さんは、近江商人のことを書いた小説が多く、その童門さんの言葉に、近江の人は「させていただきます」という言葉をよく使うとしています。今の正しい日本語では「させていただきます」というのはなく、たぶん「商いは菩薩の

**近江商人の商いのころ**

**商いは菩薩の業**

高道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏にかなうもの

利真於勤（勤めて得るは誠の利なり）

初代伊藤忠兵衛



図14 商いは菩薩の業

業」の気持ちがそういう言葉を使っている気がします。また伊藤忠兵衛さんは「利眞於勤」という言葉も残され、これは一生懸命気張って儲けた利益が本当の利益だ。ということです。

また、西川利右衛門さんは「先義後利榮」の言葉を残しており、これは「まずもって義理を欠かない行動をしよう。そうしたら後から利益はついてくる」ということです。この言葉を利右衛門さんは分家する時に揮毫して与えました。

## (2) 「陰徳善事」

「陰徳善事」という言葉は、「儉約して、爪に火をともしようなことをしてつくったお金を、世の中のために使いましょう」ということです。

また「お助け普請」とありますが、これは民間の不況時の公共投資といえるものです。景気が悪くなって仕事が少なくなってきたときに、自らの家を建てたり、寺の改修を積極的にすることで、現存する屋敷などがこのお助け普請によるものが多く見られます。

「陰徳善事」は近江八幡の大きな豪商であった伴高蹊さんがこの言葉を残しています。高蹊さんは、非常に学問を究められ、多くの著作を残していますが、陰徳善事という言葉は、つまり、のちの三方よしに通じる、利益の社会還元ということです。

**近江商人の商いのころ**

**陰徳善事（社会貢献）**

「陰徳善事」とは、人知れずよい行いをするという意味で、近江商人に広く尊ばれていた言葉。

商いで得た金で、道や橋を修復したり、学校や病院をつくらしたり、社会奉仕のために役立てた。  
しかし、その見返りを求めることはなく、むしろ、それを望むことを厳しく戒めている。

■陰徳とは目に見えぬかけの間に人のためになるよう・・・  
幸をえるためとあてにしてするは陰徳にあらず、無心にてすれば自然めぐるなり（伴高蹊）

自分が今日あるのは社会、世間のおかげであって、その恩返しとして社会に戻すという行いは、何代にもわたって事業の拡大を行っていく中で、自分の方では計り知れない社会の恵みに感謝する気持ちだった。

■お助け普請—民間による不況期の公共事業投資

図15 陰徳善事

このような「陰徳善事」の事例としては、薩摩治郎八さんの社会貢献があります。治郎八さんは、坊ちゃん、湯水のようにお金を使ったのですが、日本政府に代わって様々な社会貢献事業を行い、フランスと日本の文化の架け橋をしています。近江商人の系譜につながるとはいえ、特異な存在です。

静岡で醸造業を行った山中兵右衛門さんは、昭和初期の不況期に自宅を新築されましたがこうした普請を「お助け普請」といいます。この時建設された建物は、その後、日野町に寄贈され、今は近江日野

商人館として公開されています。

蝦夷地に進出し、その後北海道の日魯漁業（現ニチロ）に権利を譲渡した藤野喜平家も、やはり不況のときに家を建てて豊会館を残しています。



図16 陰徳善事の事例

## 9. 現代に通じる近江商人

近江商人は商いで得た利益を「陰徳善事」という形で、商い場などの地域で社会貢献事業を展開してきました。「陰徳善事」を、現在では「三方よし」と言い換えています。陰徳善事というのは語呂も悪く、このあたりを小倉榮一郎先生は「三方よし」に置き換えていただき、わかりやすいということで波及しました。近江商人は、非常に進んだ会計システムを展開し、実力本位の権限委譲とリストラ対策をして、押し込み隠居もやむを得ない。また、地域のベンチャー育成にも寄与してきた商人たちだったのです。

こうした近江商人の特性や精神を滋賀のまちづくり、産業興しにつなげようということで始まったのがAKINDO フォーラムです。日本国内の著名な首長さんや、企業家、さらには海外からの実務者を招聘して大きなイベントを開催し、その成果を受けて、滋賀県AKINDO 委員会の設立となりました。

**現代に通じる近江商人**

- 近江に本店を置き、**全国を商圈**として商いを行った商人
- 物流を盛んにし、各地の産物を全国に広める商法を確立した **諸国産物回し**（のこぎり商い）
- 商い場である地域社会への貢献活動を積極的に展開した。  
**「陰徳善事」⇒「三方よし」**
- 進んだ会計システムを確立し、**永續経営を求めた。**
- 実力本位の**権限委譲とリストラ対策** 押し込み隠居、宿下り
- 新規参入者への積極的投資で、**地域のベンチャー育成に努めた**

**この特性を滋賀のまちづくり、産業興しにつなげよう**

AKINDOフォーラムの開催  
AKINDO委員会の設立  
三方よし研究所へ

図17 現代に通じる近江商人

## 10. 現代に活かそう近江商人の経営理念

昭和59年に、「てんびんの詩」が発表されますが、これは多くの企業研修の教材として使われました。昭和初期まで、鉄のお鍋の蓋は木製が主流でしたが、その木の蓋が割れたりするので、その蓋だけを売りに歩く近江商人2代目の艱難辛苦の様子が映画やビデオになり、社員研修で非常によく使われました。昭和60年に邦光史郎さんが「近江商人の顕彰」を提案され、昭和63年には「てんびんの詩」が映画化され大ヒットしました。同じ時期に小倉榮一郎先生が「三方よし」という言葉を使った『近江商人の経営』という本を書き、1万冊売れました。このような背景があって、平成元年にAKINDOフォーラムを開催することが決まりました。

**現代に活かそう近江商人の経営理念**

昭和47年(1972)  
「てんびんの詩」の構想が生まれる。

昭和59年(1984)  
竹本幸之祐「てんびんの詩」を発表。研修教材として人気を集める

昭和60年(1985)  
邦光史郎氏が稲葉稔知事に「近江商人の顕彰」を提言

昭和63年(1988)  
『てんびんの詩』が映画化  
小倉榮一郎著『近江商人の経営』が大ヒット、「三方よし」初出

平成元年(1989)  
あきんどフォーラムの取り組み始まる。



フォーラム記念品として発売された『近江商人の理念-近江商人 家訓撰集』(小倉榮一郎著)の冒頭に『売り手によし 買い手によし』は常套で『世間によし』が近江商人の特色と記される

NPO法人 三方よし研究所2014 23

図18 近江商人の経営理念

## 11. AKINDO 委員会の事業展開

平成2年から始まったAKINDOフォーラムの時は、自治体はお金があり、滋賀県では内館牧子さんの脚本でミュージカルを作り、出演者も外国(ブロードウェイなど)からも呼んできて、全国8カ所で1週間ずつの公演を行いました。さらに全国各地でイベントの講演会やシンポジウムを開催後、世界AKINDOフォーラムを開催されたのでした。世界都市経営会議、国際AKINDOフォーラム、世界起業家会議などを開催し、平成4年に滋賀県AKINDO委員会が設立されました。

平成5年には、モラロジー研究所が同じように「三方よしの経営」という本を出しています。

平成9年には「三方よし」の原典と言われる中村治兵衛家の書き置きが見つかります。この中には「三方よし」という言葉は全然載っていませんが、「他国に行商する者すべてその土地の人のことを大事にせよ」と書かれています。私たちはこれを「三方よし」の原典としています。

AKINDO委員会の事業展開の推移	
平成2年(1990) 平成3年(1991)	AKINDOフォーラムイベント全国各地で開催 AKINDOフォーラムの宣伝用にミュージカル「ポタージュナイト」制作  国際AKINDOフォーラムで「三方よし」が目目される。
平成4年(1992)	継続的な事業展開する目的で滋賀県AKINDO委員会が設立。 委員会下部組織としてのAKINDO会議の設置  AKINDOセミナーおよび講演会の開催、平成12年度まで継続開催
平成5年(1993)	新近江商人塾が開講(～平成11年度) ふるさと探訪ウォーク事業がはじまる。  (※)モラロジー研究所『三方よしの経営』を発行。
平成7年(1995) 平成8年(1996)	情報誌「三方よし」を創刊。近江商人ふるさとマップの作成配布 女性起業家セミナーの開催 平成11年度まで継続 近江商人研究ネットワークの設立(座長末永園紀氏)
平成9年(1997)	三方よしの原典と言われる中村治兵衛書置き見つかる

図19 AKINDO 委員会の事業展開の推移①



平成14年(2002) 国際AKINDO会議でリチャードエバンス(社会倫理説明責任研究所所長)が「社会説明責任と三方よし」を話題。この時、まだCSRという言葉は普及していなかった。

滋賀県AKINDO委員会解散、事業を滋賀県産業支援プラザが引き継ぐ。  
NPO法人三方よし研究所設立

平成15年(2003) **企業の社会的責任(CSR)の波及により近江商人の経営理念への評価が高まる**

平成17年(2005) 食品表示偽装など企業の倫理観欠落の問題が多発、企業の社会的倫理観が浮上

平成18年(2006) 滋賀県経済同友会が「滋賀経営CSRモデル」を発表しモデル企業を表彰

平成21年(2009) 滋賀県産業支援プラザがAKINDO事業から撤退、AKINDO委員会の活動記録をNPOが引き継ぐ。

平成24年(2012) NPO法人三方よし研究所設立10周年 『近江商人の理念と商法』発行

NPO法人 三方よし研究所2014 26

図20 AKINDO 委員会の事業展開の推移②

## 12. 売り手よし 買い手よし 世間よし

売ると買う人の関係の中で、売る人はものを買ったら収益になり、買う人もお金を払い、物が手に入るというそれぞれの利点があります。しかしここで、売る人は責任を持った商品を提供し、買う人は売ると長い間のつき合いがしたいということが大事だと思います。近江商人はいい加減なもの売らないということを厳に慎むことを言っており、「売る人も誠心誠意、品物をよく吟味して売りなさい。買う人も安いからというのでなく、この人がどういう人なのか吟味した上で、長いつき合いで買うほうがいい。そして出てきた利益を社会のために使いましょう」という考えを持っています。

普通、「三方よし」は、売り手、買い手、世間の三つのトライアングルがうまくいけばいいと考える人が多いですが、私どもは、「生産者も販売者も消費者も含めた社会全体が幸福に」ということをキャッチフレーズとしています。「三方よし」はCSR、企業の社会的責任の源流であるとまとめて、これを私どもの旗印として進めています。

東京に経営倫理学会という研究団体があり、大手企業のCSR担当者や流通などの研究者がいろいろ

研究していますが、「CSR 新潮流」と言い、パートナーシップ、つながりが一番難しいとしています。名古屋にあるパートナーシップサポートセンターという NPO の団体は、企業と市民団体と地域の 3 者が連携して何か新しいものがつくれないか、中小企業の CSR の考え方を実践していこうということで、NPO やまちづくりをしていく人に対して、毎年事例発表と大賞選定をしています。そうした事例の中にも、企業も自治体も地域社会もまちづくり団体も、それぞれが思い思いではなく、いろいろなパートナーシップ、連帯、つながりを広げていくことで課題解決の糸口が見つかるかと説いています。今、地域社会で、いろんな立場の人々や組織が手をつなぎ合わせながら、やっていくという時代になってきていると思います。

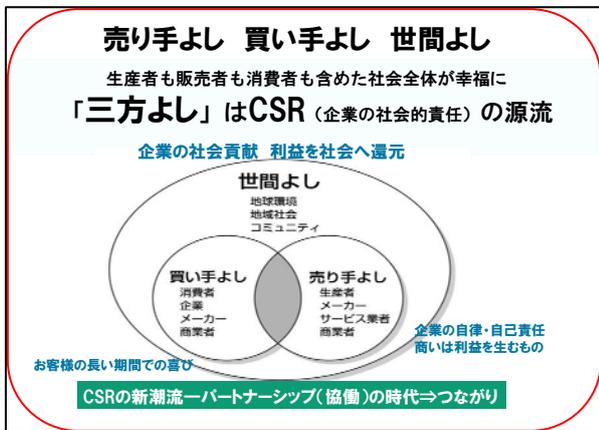


図21 売り手よし 買い手よし 世間よし

### 13. 21 世紀に持続可能な企業のあり方

図 22 は三方よし研究所の理念ですが、三方よし理念普及は、決して私たちが旗を振ってやるのではなく、少しずつ背中を押すようなことが私たちの使命だと思っています。幸いなことに、滋賀県には、私どもの活動に賛同してくださる人が多く、また 10 年間滋賀県が後押しをしてくれたことで、「三方よし」の理念を理解し、企業が地域で何かをしなくてはいけないことをよく認識いただいています。

滋賀県の特徴は「リベラル自治体の舵取り」であり、元知事の武村正義さんは、非常に環境推進に熱心で今も、地域社会のお目付役として側面的に後押ししているなど、常にトップが真摯な姿勢で引っ張ってくださることが力強く思います。

「びわ湖条例」は、これまでの常識で考えられなかったような、主婦層が中心となった石けん運動が、住民パワーを結集して条例が制定されました。琵琶湖では、他の地域と異なる滋賀らしさが、多く見られます。近年は、障害をもつ方や、正規の勉強をしてない方の芸術活動を支援するアールブリュットも

積極的にやっています。

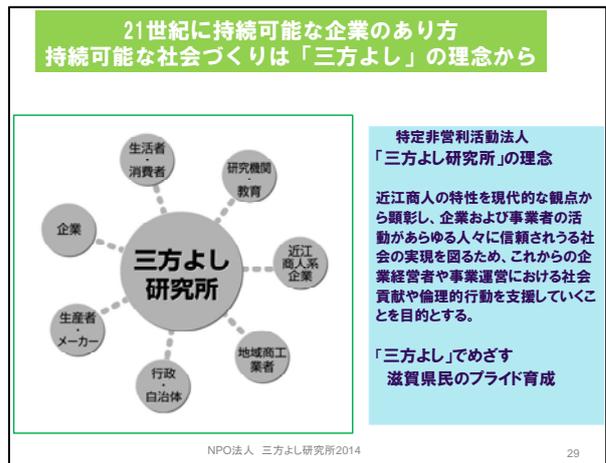


図22 三方よし研究所の理念

### 14. 近江商人の遺伝子のまちづくりへ

近江商人のまちづくりの事例として、図 23 の左側の「長浜城」は豊臣秀吉氏が最初に作りましたが、今日において城がないのは寂しいということで、たまたま 2 億円ほど寄附してくれる方がいて、それをきっかけに市民が一人 1 万円くらい寄附する運動が始まり、新しい長浜城ができました。これをつくった市民の力が、黒壁を守ろう、ガラスを再生しようというスローガンで、長浜の黒壁をつくりました。

株式会社黒壁の笹原司朗初代社長は、各地でまちづくりの講演で「20 年くらい前は、当時 1 時間に 4 人と猫 1 匹しか通らなかった」といっていますが、それが今では年間 200 万人が訪れるようになり、新たな展開で黒壁は頑張っています。笹原さんは、青年会議所の理事長をされていた方で、甲子園にも出場したスポーツマンですが、若い人の力、特に女性の力を使うのが上手です。今も株式会社黒壁のリーダー格はほとんど女性で、私もこの会社と縁があって情報誌を発行していますが、その編集長も代々女性でとにかく元気です。長浜市では現在は、高齢者向けのプラチナハウスをつくって、高齢者の人に物をつくって売ってもらう活動をしています。

滋賀県の町づくりの双璧といえるのは近江八幡市です。ここには全国でも有名な和洋菓子の「たねや」が八幡堀近くにあり、人気を集めています。八幡堀には、西川産業の蔵屋敷が連なり、四季折々の素晴らしい光景は時代劇にはかかせない人気スポットとなっています。

八幡堀は 40 年くらい前まではどぶ川で、排水が流れ込んで大変だったところを、青年会議所 OB の方で後に市長になる川端五兵衛さんが「八幡堀を埋めてしまったらそれで歴史は終わるので、このまま生かしていく」ということでよみがえりました。朝

の連続ドラマ「ごちそうさん」の堀端の風景は、全部八幡堀です。また、ヴォーリスさんという宣教師の方が活躍した町でもあり、そういう人を受け入れた広い視野もありました。

**近江商人の遺伝子のまちづくりへ**  
**一まちの元気は自分たちが作る**

<div style="background-color: #4CAF50; color: white; text-align: center; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">秀吉の城下町長浜市黒壁の挑戦</div> <p>市民で作った長浜城 黒壁を守ろう ガラスで再生 高齢者が輝く町 秀吉が作った町衆のまちの底力</p> <p>20年前、一時間に4人と猫一匹しか通らなかった街角に今や年間200万人が</p> 	<div style="background-color: #4CAF50; color: white; text-align: center; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">近江商人が活躍した八幡堀の再生</div> <p>まちの誇り八幡商人 八幡堀再生に立ち上がった市民 商家が立ち並ぶ新町は伝建地区 江戸時代より自治の精神にあふれた市民 メレル・ヴォーリスを受け入れた見識の広さ</p> 
--	--

図 23 近江商人の遺伝子のまちづくりへ①

まちづくりに近江商人の遺伝子が受け継がれると同時に、滋賀県に大きな特色として、環境熱心県であることが言えます。

東日本大震災後の放射能被害回復に効果的として注目される菜の花ですが、廃食油からバイオディーゼルのつくろうという菜の花プロジェクトは滋賀県発で全国に広がっています。

さらに、県内の小学校の5年生は、環境学習船「うみの子」で、琵琶湖で環境教育を受けています。環境に優しいものしか売らない環境生協も日本で初めて滋賀県で誕生しました。

昭和30年代くらいから、琵琶湖がどんどん汚れていき、何とかしなくてはいけないということで琵琶湖条例ができましたが、そのときに立ち上がったご婦人方が、何が環境にいいのか、何が人に害があるのかを検証しつつ、食べるもの、着るもの、住まい方を研究してきたのが環境生協で、昨年「まちづくり大賞」で表彰されました。

また、循環型社会を提唱する企業として、包装資材のメーカーの「新江州」があります。この会社は、段ボールをつくっていますが、ここの現会長は何回も使える段ボールをつくろうという提案を営業の人にしました。段ボールは、使い捨てでこそ営業の売上が上がるので、社内でものすごく反対がありましたが、結果的にはそれが功を奏し、今では住宅関連企業になっています。この会長は、循環型社会研究所を立ち上げ、自分で率先して、環境学者、作家などを呼んで一般住民の前で講演してもらいながら、情報誌を出し続けています。

小さな企業でも進んだ実績が評価されています。

その例が、「油藤」というガソリンスタンドです。ゴミを10種類くらいに分別してスタンドへ持ってきてもらうエコステーションを作っています。「油藤」ではそのゴミを必要など所に持っていき、バイオディーゼルのつくるなどの普及活動をしています。まだ40代ですが、こうした自発的な活動に生まれてくる土壤ができつつあると思います。

埼玉県で渋沢栄一賞というのが創設され、第1回受賞が滋賀県の「日吉」という企業です。この会社は上下水道が普及する前には、バキュームカーでの収集作業を業としていましたが、新しく就任した社長が非常に環境に熱心な方で、効率的な作業工程を組むことから始まり、今では微生物研究まで特化して、特にアフリカ、東南アジアの留学生をどんどん受け入れ、帰国させ、その国の人々の環境衛生活動に尽力されています。

同じく渋沢栄一賞を受賞された「たねや」の山本会長は、よもぎ農園で無農薬の栽培を障害者に手伝ってもらい、そこでとれたよもぎでよもぎ団子を作っています。そのため、生産量に限界量があるので、たねやのよもぎ団子の販売期間は非常に限定されています。本当を言えば限定商品をつくらないほうが商売的にはいいのですが、大量生産で毎日毎日売るといものは駄目という考えで、あえて期間限定のものをつくっているところが評価されたと思います。

一方、滋賀県の経済界も、経済同友会がCSR大賞を創設しました。また、平和堂財団では、3年前から「夏原 Grant」という環境の活動をしている団体に寄附する活動を始めており、ナショナルブランドの伊藤園でも、滋賀県で売れた分の6,000万円くらいを寄附して、琵琶湖を守るために琵琶湖の周辺の森を守ることに限定した使い方をするなど、経済界が随分支援してくれています。

経済界とともに一番大事なのが学校です。40年前、滋賀県には大学が1校、短大が1校しかありませんでしたが、それから10年後には、京都の立命館大学、龍谷大学など、大学が13校になりました。大学が来るというのは、学生が来るという以上に頭脳が来るので、産官学でいろいろな人材育成ができます。人材が育ちまちづくりのリーダーの育成もどんどん進んでおり、こうしたことが滋賀県の今の底上げの力になっていると思います。

私たちは、1000年以上の歴史のある滋賀県という土地に生まれ育って、先人が歩んできた英知を学びつつ何がやれるか、何をすべきかを考えながら、ともに手を携えながら動いていきたいと感じています。

三方よし研究所は、それに対してどんな力を出しているかは疑問ですが、私どもは資金があるわけで

もありませんし、特別な知恵があるわけでもありません。ただ、人と人をつなぐネットワークの知恵として、例えばここでこういうことをやっている人がいる、こういうことをしていた事例があるということを展開して引っ張っていくことはできると思っています。幸いにして、商工会連合会の青年部や青年会議所、シンクタンクというところで仕事をされていた方が多く、税理士、弁理士、会計士、社会労務士の方がメンバーに非常に多くいますので、理事長をはじめ、同じ話をしても、様々な業界の話ができることが三方よし研究所の強みになっています。

菜の花プロジェクトとバイオディーゼル	循環型社会を提唱する企業
琵琶湖赤潮発生で進んだ住民運動から「菜の花プロジェクト」が誕生。 バイオディーゼル再生工場と農家レストラン 環境生協の誕生と進化 環境教育学習船「うみの子」の就航	包装資材メーカーが提唱する「循環型社会」 会長自ら率先して啓発誌「MOH通信」を発行 ガソリンスタンドは街のエコステーション バイオディーゼル普及に尽力 渋沢栄一賞を受賞 菓子メーカー「たねや」の挑戦 農園など 汚泥収集から世界の環境を考える「日吉」
滋賀経営CSRモデル	産官学で目指す人材育成
滋賀経済同友会が提唱 2006年に「滋賀CSR大賞」を創設	滋賀県立大学の淡海理人 商工会連合会のあきんど塾 産業支援プラザのビジネスカフェ
歴史や先人の教訓に学びつつ、いま、 自分たちがやるべきこと、やれるべきことを考えて行動する このことが、いまの淡海に生きるもの使命ではないだろうか？	
NPO法人 三方よし研究所2014 32	

図24 近江商人の遺伝子のまちづくりへ②

## 15. 近江商人の事例に学ぶ

私は戦後生まれの団塊の世代で、景気が下がるということをほとんど経験せずに生きた世代ですが、今の時代は景気が下がってきています。近江商人が発祥した江戸時代後半も今と同じように景気が下がった時代であり、そういうときの商人が考えたことは今に通じるのかもしれないと思っています。

また、近江商人の家訓の中に、「商売替え御法度」という家訓があります。例えば「布団屋をしていたら、布団だけをつくってほかのことはしない」とあります。しかし、西川産業は、もともとは弓を作っていて、畳、蚊帳を作り、今は布団を作り、そのほかに不動産をしています。なぜその家訓があるのにそういうことをしているのかというと、オーナーの独断でことを運んではいけないということを言っており、業態変更をどんどんやっています。その他、柳屋ポマードは、滋賀県の出身の方が中国からの香料を輸入して商売していますが、柳鬢付け油から始まり、白粉、男性整髪に移行して、今はビル経営をしているなど業態をどんどん替えています。商売替え御法度という言葉がある反面、どんどん替えてきたのが近江商人です。

こうしたことから、近江商人の理念に学ぶ滋賀のプライドづくり、ブランドづくりの推進になんらか

のおやくにたてる三方よし研究所でありたいと思っています。

### 近江商人の事例に学ぶ

不況期に発生した  
一切の人を大切に（三方よし）  
私利をむさぼらない商売（利益は天道の恵み次第）  
地域の為になる商売（産物産物産、地場産業の振興）  
時代に即応した業態変更の必要性（商売替法度）

↓

過去を断ち切る勇気が必要  
生き残る信念と、相手から信頼される人間に、企業に  
乗って向上することはない。工夫が大事、始末・儉約  
変革の時代の風や空気を読み取る努力が必要

NPO法人三方よし研究所の志

近江商人の理念に学ぶ滋賀のプライドづくり、ブランドづくり

NPO法人 三方よし研究所2014 33

図25 近江商人の事例に学ぶ

## 16. 質疑応答

**質問①** 近江商人のような丁稚教育の形では、今ではパワハラなどで若い者がついてこないと思いますが、今でもそういう教育を実行しているところがありますか。

**回答①** 教育の面でそこまでいっている企業は、今は、ほとんどないと思います。昔は秩父の企業は滋賀県から人を採用していましたが、昭和40年ごろにパナソニック、ブリジストン、東レなどの企業が滋賀県に立地して滋賀県内で就職ができるという状況になりましたので、そういう丁稚制度はなくなったと思います。ただ、以前はかなり厳しいしつけはあったと聞いており、近江商人の呉服屋に就職した人は、最初は縄の荷造りから始まったと言っていました。

**質問②** 近江商人の行動や考え方は、平和であるからこそできると思いますが、戦前や戦時中の近江商人はどのように商いをやっていたか。

**回答②** 例えば、朝鮮半島で呉服屋ができないうことで、満州から中国へ行って百貨店をつくった人がいます。それから、明治時代になってから近江商人の大きな商家の後継ぎは、ほとんど海外へ留学しています。伊藤忠商事の2代目は外国での生活が長かったので、お風呂から何から全部洋式です。海外の経験を随分積んでいたので、逆に戦争中はうまく商売されているところも多かったと思います。印刷業界でもガリ版を発明した近江商人の系統の方は、戦争中に関東軍にその機械を納入して、戦地が広がるにつれて出荷高が多くなり、大きく商売を伸ばしたという経緯があります。また、高島商人が盛岡にたくさん行っていますが、これは南部藩が大坂

冬の陣か夏の陣かどちらかのときに、高島商人が大坂の宿舎の食糧、水などを供給して、それを見込んだ南部藩が、盛岡で城下町の建設をするときに助けてほしいという要望がきっかけで向こうへ行っています。つまり、戦時中の物資補給のような手伝いから始まった人も多々あると思います。ただ、詳細なことはわかりませんが、商家の数は明治になってから3分の1くらいに減っており、特に平成に入ってからはずっと減っていると思います。なかなか長続きできないのと、持ちこたえられないというのがあります。

**質問③** 滋賀県では、ある共通の思想を持った人たちがあつた時代に発生していると思ったのですが、今日の講演では、文化として引き継いで広がっている印象をうけました。滋賀県では、ある共通の意識を持った人が出たりして、延々と続いているという文化、教育はありますか。

**回答③** 文化もありますし、教育も大きいと思います。寺院や武家の浪人が、町の子供を、男女や貧富の差を問わず教えていた事例は残っています。特に、寺院の人口当たりの数は、全国的にみても非常に多いので、そういうところでの教育の制度は非常にありました。また、江戸時代中期に石田梅岩氏という学者が、商人は士農工商の中で低いところに位置づけられているが、決してそうではないと教えており、それが普及していきました。それから近江聖人の中江藤樹氏という儒学の学者の教えも識者の中で広がりました。そのため、初代、2代目くらいまでの近江商人は天秤棒を担いで行商することがありましたが、そこそこの商家になると教養を身につけ、学問をしていくことになり、そういう人が分家をしてピラミッド的に広がっていったと思います。

**質問④** 近江は仏の国というところがありますが、社会貢献という考え方は、仏教という宗教的なものからきているのですか。

**回答④** そう思います。忘己利他という話をしましたが、自分が稼いだものは自分だけが偉いから利益が出たのではなく、使用人、周辺の人などいろいろな地域の人々の力があり、利益を得させていただいたものであります。そのため、自分のものとして残しておくのではなく、多少なりとも分配する必要があるという精神があると思います。それと、もう一つには、近江はものすごく貧しいところだったので、収益が出て豪商になった人が地域・社会への還元・分配をやっていかないと社会が成り立たなかったのかもしれない。昔は、子供が3人いたとして、長男は親の資産を継げますが、次男、三男は分配して

もらえず、養子か商人になるかということで、奥が狭いです。海のある地域は、海も広がっているし、山も広がっていますが、滋賀県はお盆の中でその中に琵琶湖があるから耕地面積が非常に狭く、山もふさがっています。そのため山を越えて出なくてはいけないということで商人が発達したと思います。それと、収入源は少なく、例えば能楽、神楽、祭りなどはたくさん残っていますが、そういうときにお金を出した人は商人ばかりでしたので、社会貢献、地域貢献という言葉ではありませんが、みんな横並びであったと思います。